

「研究論文」

対人関係におけるルールの共有化を図る学級づくり

内野 成美（長崎大学大学院教育学研究科）

田中 英明（長崎大学大学院教育学研究科）

川渕正昭（長崎大学教育学部附属中学校）

松崎理恵（長崎大学教育学部附属中学校）

1. はじめに

2013年6月に「いじめ防止対策推進法」が制定され、9月から施行されている。この「いじめ防止対策推進法」では、いじめがその被害を受けた児童生徒に与える重大な影響を鑑み、国や地方公共団体、学校のみならず、保護者のいじめ防止等の対策に関する責務に触れており、第四条では「児童等は、いじめを行ってはならない。」と児童等自身の努めに関しても触れている。

しかし、「平成24年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省，2013）の結果によると、いじめの認知件数は小学校が117,383件、中学校は63,634件であり、国公私立の小・中・高・特別支援学校におけるいじめの認知件数は合わせて198,108件であった。児童生徒1千人あたりの認知件数は14.3件（平成23年度は5.0件）であり、およそ100人に1～2人はいじめを認知しているという結果となった。その中で、最も多いものは、「冷やかしからかい、悪口や脅し文句」であり、64.3%であった。ただ、認知件数の結果に関しては、調査結果が自治体によって認知件数が最も多い県では166.1件、最も少ない県では2.0件とばらつきがあり、調査方法自体の問題点も指摘されている。いずれにしろ、程度の違いはあっても友達同士の関係の中で、嫌な思いをすることがあると感じている子どもが一定の割合で存在するということの表れであろう。そのため、どの子、どの学校にも起こりうるという考えのもと予防的取組が必要であると考える。

2. Q-Uの活用について

Q-Uは、河村茂雄氏によって開発をされ市販されている学級集団のアセスメント尺度である。日本テストスタンダード委員会の審査基準を満たし、信頼性と妥当性も保証され、標準化の認定を受けた教育・心理検査である。大津市立中学校におけるいじめに関する第三者委員会の調査報告書（大津市，2013）においても、いじめの実態把握に関してQ-U理論を基にしたアンケートの活用も例示されている。このQ-U理論およびQ-Uアンケートを開発した河村は、その作成の経緯に関し「教師が（アンケート実施に際して）抵抗を起こさず、日々の教育実践において児童理解の資料として活用できる尺度を作成」（河村，1997）と述べている。また、河村は、学級集団の育成に関しルールとリレーションが、バラ

ンス良く成立している満足型の学級では、子どもの不適応やいじめの発生率も少なく、学力も定着しやすいということを述べている。しかし、一方、満足型学級であっても満足群出現率の違いによって集団の質の違いがあることが指摘されている（松崎，2012）。この点に関し、河村自身も同様の見解を示しており、また「自分の都合や身近な友だちへの気遣いなど私的な部分が、公的な決まりより優先され、学級全体の雰囲気になる可能性がある」と指摘している（河村，2007）。では如何にして、対人関係のルールやリレーションの共有化を図る学級づくりをしていけばよいのか。本研究は、学級内で不安や不満を抱える生徒の実態を把握するとともに、クラスワイドな支援法についての検討を行いたいと考える。

3. 研究

(1) 目的

Q-Uアンケートを6月と12月に実施し、生徒の所属群の変化と、その変化内容を分析し、変化の特徴とその変化に影響を与えた要因を明らかにすることを目的とする。

(2) 方法

①調査対象

201x年6月と12月に、N市内、N大学附属N中学校の1年生～3年生のうち2回とも実施可能であった403名に関し、調査を行った。N中学校は、入学者の約8割が同じ敷地内のN小学校から進学する。N小学校もN中学校も受験を経ての入学となる。生徒の多くは、多くが塾に通っており、大学進学を視野に入れて学習をしている印象を受ける。

②手続き

アンケート用紙は、楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-Uを用いた。各担任教諭に実施を依頼し、回収後、調査担当者が集計を行った。

(3) 結果

①1回目と2回目の所属群の割合

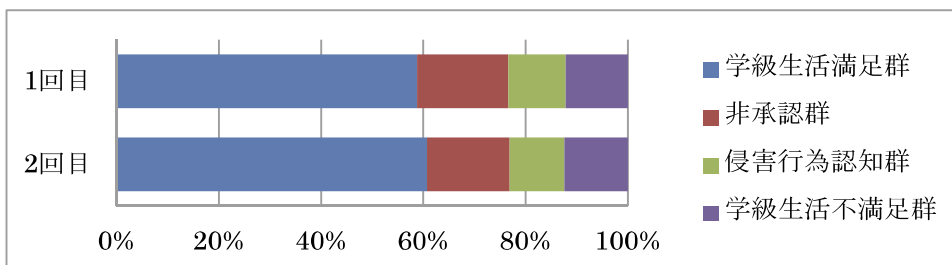


図1 回数別の所属群ごとの割合

1回目と2回目ともに学級生活満足群が6割を越え、所属群の割合に大きな差は見られなかった。

②所属群の変化別の比較

所属群の変化別に分類し、変化別に承認得点・被侵害得点並びに学校生活意欲を構成する5項目の比較を行った。その結果を図2～8に示す。

変化別の分類は以下の7グループとした。それぞれの所属人数を表1に示す。

- 1：2回目に他群から不満足群へ変化
- 2：満足群から非承認群・侵害行為認知群へ変化
- 3：1回目も2回目も不満足群で変化なし
- 4：不満足群から非承認群・侵害行為認知群へ変化
- 5：非承認群・侵害行為認知群で変化なし
- 6：2回目に他群から満足群へ変化
- 7：満足群で変化なし

表1 所属群の変化別人数

所属群の変化	1	2	3	4	5	6	7
人数(人)	29	43	21	16	50	57	187

【学級生活満足度の比較】

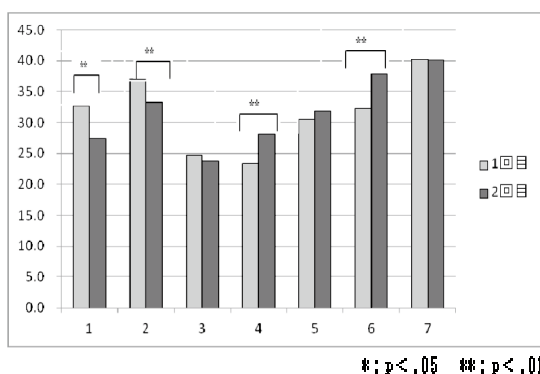


図2 変化別の承認得点

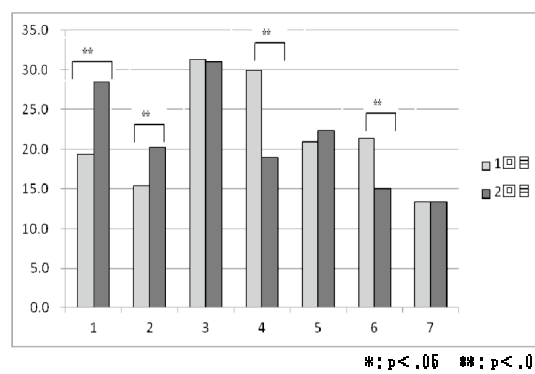


図3 変化別の被侵害得点

学級生活満足度を構成する承認得点と被侵害得点の各グループの平均点の比較を図2と図3に示す。

承認得点の平均は、図2に示すように、他群から不満足群や満足群から非承認群・侵害行為認知群に変化したグループでは1%水準で有意に減少し、不満足群から非承認群・侵害行為認知群に変化したグループや他群から満足群に変化したグループでは、1%水準で有意に上昇していた。

被侵害得点の平均は、図3に示す通り、他群から不満足群や満足群から承認群・侵害行為認知群に変化したグループでは1%水準で有意に上昇し、不満足群から非承認群・侵害行為認知群、あるいは他群から満足群に変化したグループでは1%水準で有意に減少していた。この結果を詳細に分析するために、質問項目ごとに

多重比較検定を行った結果を表2、表3に示す。なお、分析はエクセル検定を用いて行ったが紙面の都合で詳しい分析結果は省略する。

(表中 * : $p < .05$, ** : $p < .01$)

表2 変化別の承認尺度各項目の平均点の変化

		1	2	3	4	5	6	7
承認1	1回目	3.41	3.67	2.76	2.38	3.04	3.18	3.90
	2回目	2.55**	3.12**	2.33	3.19**	3.14	3.74**	3.95
承認2	1回目	2.69	3.44	2.14	1.75	2.60	2.93	3.57
	2回目	2.21*	2.91**	2.10	2.63**	2.68	3.47**	3.68
承認3	1回目	3.24	3.67	2.71	2.06	2.86	3.11	4.10
	2回目	2.93	3.42	2.38	2.88**	3.16	3.79**	4.12
承認4	1回目	3.07	3.88	2.52	2.50	2.96	3.25	4.00
	2回目	3.00	3.42*	2.33	2.88	3.38*	3.88**	4.05
承認5	1回目	2.93	3.23	2.14	1.94	2.64	2.82	3.59
	2回目	2.62	2.84*	2.24	2.31	2.96	3.47**	3.60
承認6	1回目	3.62	3.88	2.57	2.88	3.22	3.51	4.27
	2回目	3.17	3.51	2.76	2.81	3.40	4.02**	4.19
承認7	1回目	3.17	3.44	2.19	2.88	2.98	3.12	3.87
	2回目	2.34**	3.37	2.24	2.56	2.94	3.51*	3.77
承認8	1回目	2.72	3.40	2.00	1.81	2.56	2.63	3.58
	2回目	2.10**	2.98*	2.00	2.25	2.86	3.32**	3.52
承認9	1回目	3.97	4.26	3.05	3.00	3.88	3.88	4.75
	2回目	3.52*	4.00	2.62	3.44	3.76	4.40**	4.67
承認10	1回目	3.83	4.14	2.62	2.25	3.74	3.89	4.59
	2回目	2.93**	3.70*	2.76	3.19**	3.58	4.23	4.58

表3 変化別の被侵害尺度各項目の平均点の変化

		1	2	3	4	5	6	7
被侵害1	1回目	1.76	1.49	2.81	2.94	1.82	2.07	1.21
	2回目	2.79**	1.72	2.67	1.69**	2.08	1.42**	1.20
被侵害2	1回目	2.10	1.53	3.52	2.94	2.18	2.40	1.41
	2回目	3.21**	1.86	3.10	1.75**	2.18	1.54**	1.41
被侵害3	1回目	1.66	1.56	2.33	2.38	1.72	2.11	1.18
	2回目	2.62**	1.93*	2.19	1.44**	1.94	1.33**	1.19
被侵害4	1回目	1.59	1.26	2.48	2.63	1.68	1.88	1.12
	2回目	2.45**	1.93**	2.95	1.56**	2.00*	1.28**	1.16
被侵害5	1回目	1.59	1.21	3.00	3.00	1.70	1.77	1.09
	2回目	2.10**	1.70**	3.05	1.44**	1.82	1.16**	1.10
被侵害6	1回目	2.28	1.74	3.33	2.81	2.20	2.14	1.26
	2回目	2.83*	2.28**	3.24	1.87**	2.26	1.67**	1.26
被侵害7	1回目	1.52	1.40	3.10	3.38	2.22	1.82	1.29
	2回目	2.83**	1.81*	3.10	2.25**	2.28	1.39*	1.34
被侵害8	1回目	2.28	1.55	3.62	2.86	2.42	2.32	1.50
	2回目	3.21**	2.23*	3.48	2.13*	2.24	1.67**	1.47
被侵害9	1回目	2.24	1.86	4.05	3.38	2.78	2.37	1.47
	2回目	3.52**	2.40*	4.05	2.31**	2.94	1.67**	1.60
被侵害10	1回目	2.38	1.72	3.10	3.56	2.20	2.49	1.79
	2回目	2.97*	2.40**	3.24	2.56**	2.62*	1.95**	1.68

多くの項目で、1、2、4、6のグループに変化がみられた。1、2のグループでは2回目に有意に減少傾向が見られ、4、6のグループでは有意に上昇傾向がみられた。

【学校生活意欲尺度】

学校生活意欲尺度を構成する、「友人との関係」「学習意欲」「教師との関係」「学級との関係」「進路意識」の5項目および「学校生活意欲総合得点」の結果を図4～図9に示す。(図中 * : $p < .05$ ** : $p < .01$)

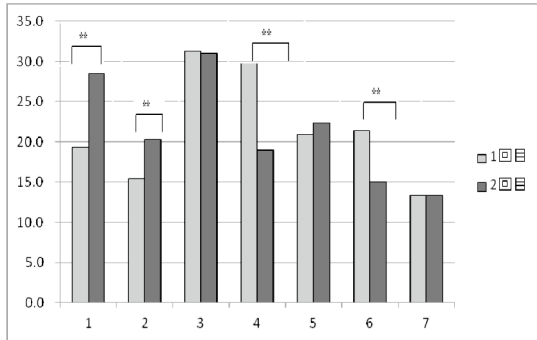


図4 変化別の友人との関係

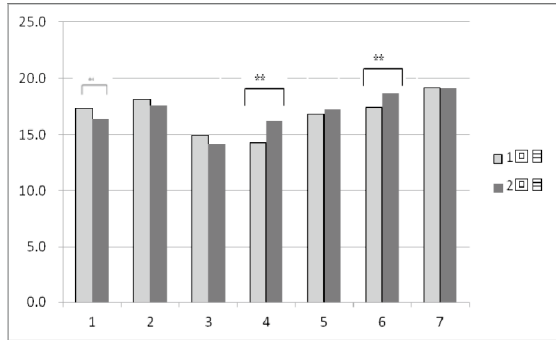


図5 変化別の学習意欲

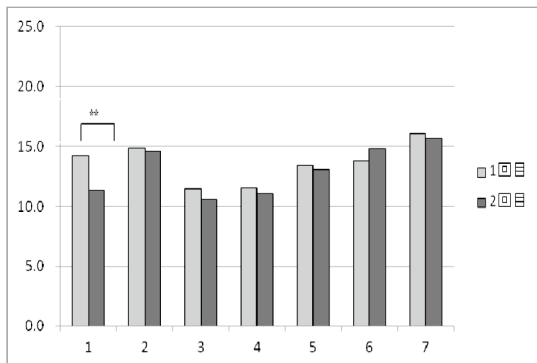


図6 変化別の教師との関係

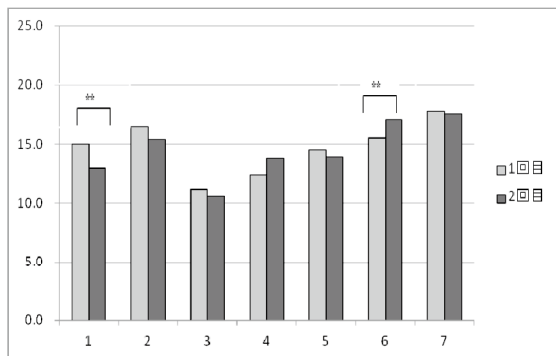


図7 変化別の学級との関係

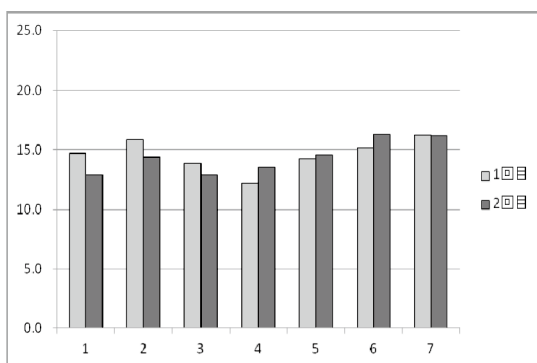


図8 変化別の進路意識

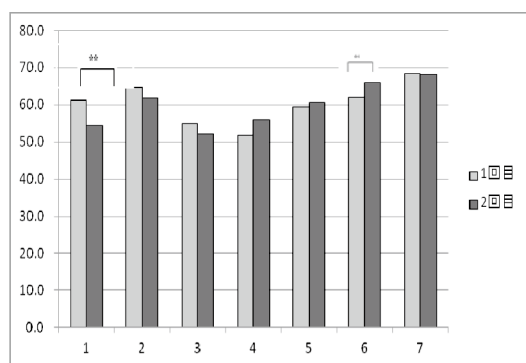


図9 変化別の学校生活意欲総合

図4に示すように、「友人との関係」においては、他群から不満足群や満足群から非承認群・侵害行為認知群に変化したグループの友人関係の意欲は減少しており、特に他群から不満足群に変化したグループでは、他にも学習意欲では5%水準、教師との関係、学級との関係では1%水準で学校生活に関する意欲が有意に

減少していた。逆に、学級生活不満足群から非承認群・侵害行為認知群や他群から満足群に変化したグループでは、友人との関係や学習意欲が1%水準で有意に増加しており、特に他群から満足群に変化したグループでは、学級との関係も有意な増加がみられた。進路意識に関しては、いずれのグループにおいても回数による変化は見られなかった。

学校生活意欲総合では、他群から不満足群に変化したグループが1%水準で有意に減少し、他群から満足群に変化したグループでは5%水準で有意に増加していた。これを、質問項目ごとに表2に示す。なお、分析はエクセル検定を用いて変化別の各水準における回数多重比較検定を行ったが紙面の都合で詳しい分析結果は省略する。

表2 学校生活意欲尺度の質問項目ごとの変化

質問項目	変化	1	2	3	4	5	6	7
友人1	1回目	4.45	4.77	4.05	3.56	4.30	4.47	4.91
	2回目	4.10*	4.53	3.71	4.13**	4.42	4.74*	4.91
友人2	1回目	4.59	4.85	4.24	4.13	4.50	4.53	4.96
	2回目	4.48	4.77	4.10	4.44	4.64	4.82*	4.95
友人3	1回目	3.79	3.88	2.86	2.34	3.86	3.58	4.37
	2回目	3.41	3.72	2.95	3.56*	3.82	4.26**	4.38
友人4	1回目	4.52	4.65	3.76	3.63	4.14	4.53	4.89
	2回目	4.34	4.53	3.43	4.13*	4.34	4.82	4.88
学習1	1回目	3.34	3.70	3.52	3.25	3.46	3.55	4.00
	2回目	3.28	3.59	3.57	3.56	3.74	3.94	4.06
学習2	1回目	4.52	4.37	4.33	3.88	4.18	4.33	4.68
	2回目	4.17	4.28	4.14	4.19	4.30	4.39	4.66
学習3	1回目	3.79	4.16	3.38	3.75	4.00	4.00	4.39
	2回目	3.45	3.86	3.48	3.69	4.14	4.16	4.38
学習4	1回目	3.21	3.60	3.33	3.06	3.26	3.56	3.92
	2回目	2.93	3.60	3.19	3.50	3.59	3.70	3.94
教師1	1回目	2.76	3.07	2.48	2.44	2.86	2.81	3.37
	2回目	2.21	3.02	2.10	2.19	2.80	3.25	3.34
教師2	1回目	3.45	3.65	2.48	2.94	3.20	3.29	3.91
	2回目	2.48**	3.59	2.48	2.44	3.10	3.45	3.86
教師3	1回目	3.86	3.84	3.33	3.00	3.76	3.75	4.22
	2回目	2.97**	3.77	3.05	3.00	3.46	3.91	4.08
教師4	1回目	4.14	4.28	3.19	3.13	3.58	3.98	4.52
	2回目	3.66*	4.21	3.00	3.44	3.68	4.19	4.40
学級1	1回目	4.17	4.42	2.81	3.38	3.94	3.91	4.58
	2回目	3.41**	4.19	2.81	3.39	3.64	4.37**	4.47
学級2	1回目	3.62	4.19	2.67	2.94	3.62	3.33	4.52
	2回目	3.14*	3.79*	2.57	3.50	3.38	4.42**	4.49
学級3	1回目	4.14	4.26	3.14	3.25	3.76	4.26	4.68
	2回目	3.52**	4.05	2.81	3.63	3.66	4.51	4.63
学級4	1回目	3.07	3.60	2.57	2.81	3.16	3.42	3.96
	2回目	2.86	3.35	2.43	2.81	3.24	3.75*	3.99
進路1	1回目	3.83	4.26	4.10	3.56	3.96	4.23	4.25
	2回目	3.59	3.91	3.43	3.69	3.96	4.44	4.17
進路2	1回目	3.90	4.21	3.67	3.39	3.78	4.09	4.36
	2回目	3.21*	3.93	3.24	3.81	3.68	4.23	4.26
進路3	1回目	3.59	3.65	3.52	2.88	3.32	3.54	3.70
	2回目	3.07	3.29	3.33	3.19	3.62	3.93	3.80
進路4	1回目	3.38	3.74	2.57	2.39	3.20	3.20	3.96
	2回目	3.07	3.26	2.90	2.88	3.34	3.60	3.96

* : $p < .05$ ** : $p < .01$

「友人との関係」では、項目1では、他群から不満足群に変化したグループにおいて5%水準で有意に減少し、他群から満足群あるいは不満足群から非承認群・侵害行為認知群に変化したグループにおいて1%水準で有意に上昇していた。

「学習意欲」に関しては、いずれの項目においても有意な差は見られなかった。「教師との関係」では、項目 2, 3, 4 において他群から不満足群に変化したグループで有意な減少が見られた。学級との関係においては、他群から不満足群に変化したグループでは、項目 1～3 において有意な減少が見られ、他群から満足群に変化したグループでは項目 1, 2, 4 において有意な上昇がみられた。進路意識に関しては、他群から不満足群に変化したグループにおいて有意な減少傾向が見られた。

(4) 考察

調査の結果から、全体的な所属群の割合に関しては 1 回目、2 回目ともに学級生活満足群が 6 割を超えており、これは全国平均 (35%) を遙かに越えていることが分かった。しかし、河村は、満足群の出現率によって学級集団には質的な違いがあると指摘している。また、小学校での調査結果であるが、松崎の調査(2012)によると、学級生活満足群が 7 割を超える学級に比べると 5 割～6 割の学級は「友人関係」「学級の雰囲気」「承認得点」「被侵害得点」での違いが明確であり、そのような点に課題を残していることが分かったと報告されている。このことから、本研究の実践校においても、何らかの課題があることが推察された。

本研究の目的である、対人関係のルールやリレーションの共有化を図る学級づくりを行うために、集団としてどのような特徴や課題があるのかを検討するために、所属群の変化に着目し検討を行った。検討を行った結果、所属群が変化したグループでは、それぞれに、いくつかの特徴ある変化が見られることが分かった。

まず、他群から満足群に変化したグループでは承認尺度項目の 5～9 において、他のグループには見られない上昇を示していた。このことから、学級や校内で自分を認めてくれる他者の存在を感じられたことが承認得点の上昇につながっていることが推察された。また、その背景には気軽に話ができる友人の存在を実感できたり、級友同士の仲が良く、その中に居ると安心できると実感できていたりすることが、結果が上昇したことの大きな要因であろうと推察された。また、対人面に関しては、有意差は見られなかったものの、友人との関係だけでなく、教師との関係に関しても全ての項目で平均点が上昇していた。

次に、他群から学級生活不満足群に変化したグループでは、承認尺度項目の 7 において他のグループに見られない減少を示していた。この項目は、学校内で「自分を認めてくれる先生」の存在を実感しているかどうかを尋ねる内容であった。このことに関しては、学校生活意欲尺度の結果においても、教師との関係の多くの項目で有意な減少傾向を示しており、学級や学校に何らかの不安や不満を感じ始めた生徒にとって、教師の果たす役割の大きさを示しているものと思われた。

そのほか、「様々な活動やおしゃべりに誘ってくれる友人」の存在を尋ねた項目においては、他群から不満足群に変化したグループでは 1% 有意に減少しており、他群から満足群や不満足群から非承認群・侵害行為認知群に変化したグループで

は有意に上昇していた。また有意に上昇しているグループの回答内容を分析すると、友人関係を円滑にする方法を知っているとの回答の平均点も上昇しており、友人関係のスキルの向上やその向上を実感する経験の有無が所属群の変化に影響を及ぼしていることが予想された。

「2. Q-Uの活用」の項でも述べたように、Q-U理論及びアンケートの開発者である河村は「自分の都合や身近な友だちへの気遣いなど私的な部分が、公的な決まりより優先され、学級全体の雰囲気になる可能性がある」と指摘している(河村, 2007)。同じ資料の中には「友達を傷つけてはいけない」という質問に「とてもそう思う」と回答する中学生は約7割存在し、「少しそう思う」まで含めると約9割の中学生が「友達を傷つけてはいけない」と回答しているが、「みんなと仲良くしなければならない」との質問には約2割の生徒が「あまり思わない」「全く思わない」と回答しているとの結果や「決まりを守らなければならない」と「あまり思わない」「全く思わない」と回答した子どもが中学生では4割弱であったという結果も述べられている。

以上のことから、対人関係のルールを共有化する学級づくりを行うためには、まず、教師・級友双方との人間関係を円滑にするためのリレーションづくりを意識した活動を行うことが必要であろうということが示唆された。

4. おわりに

今回、調査を行ったN中学校は、入学者の約8割が同じ小学校からの進学者である。小学校は、他の小学校同様学級担任制であり、本研究では触れていないが、学級生活満足群は全体の7～8割を占めている。中学校は教科担任制となり、もちろん各担任教諭は学級づくりにも力を注いでいるが、生徒側から見ると「教科の先生」という意識の方が強いのかもしれない。教師と生徒の意識の差異の検証や多くのデータでの検討に関しては、今後、更に研究を進めていきたいと考える。

参考・引用文献

文部科学省 いじめ防止対策推進法(平成25年法律第71号)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1337278.htm (2014/1/13 アクセス)

文部科学省 平成24年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果について

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1341728_01_1.pdf

(2014/1/13 アクセス)

天津市立中学校におけるいじめに関する第三者調査委員会 2012 『調査報告書』

河村茂雄 1997 「いじめ・学級不適応児童発見尺度の作成」 カウンセリング研究, 30 112-120

河村茂雄 2007a 『データが語る①学校の課題』 図書文化社

河村茂雄 2007b 『データが語る②子どもの実態』 図書文化社

松崎学 2012 「Q-U満足型学級集団の質の違いに関する探索的研究I」

山形大学 教職・教育実践研究, 7 9-21